

巻頭言

雪国の地域づくり

清水 浩志郎



地域づくりや国づくりには、古今東西ともに変わらない原理原則がある。それは、安全、安心、快適、そして美の追求で、こうした地域社会の形成のために、私たちは豊かさを求めて地域づくりや国づくりを行ってきた。

戦後、まずはじめにわが国が求めたのは、食の豊かさで、国土計画は食の増産を基本に実施された。秋田県大潟村や、鳥取・島根両県にまたがる中海干拓事業、岩手県北上川流域（昭和27年策定の我が国最初の総合開発計画）構想もすべて食の増産計画の下に行われてきたのである。昭和30年代後半、池田内閣は所得増進計画を策定し、豊かさの目安が食から「モノ」に移った。田中内閣の日本列島改造論はそのピークであったといえる。その後、2回のオイルショックを経て地域づくりにも新たな発想が必要となり、そこで提案されたのが、「心の豊かさ」である。こうしたプロセスを経て、将来のキーワードとしては、癒し、文化、健康、これらを総合的にまとめれば、「愛」が重要な視座になると考えている。

いずれにしても今後、ますます心や意識の領域が重要になることを念頭に国づくりや地域づくりはどうあるべきかという視点からの国土構築理念が重要となろう。雪国にはこれらキーワードを満たす要素が多く、雪を資源と考えた場合、エネルギーにもなるし、水資源にもなる。また、雪国では多様な暮らし、イベントも多い。癒しをもとめ、雪を見るだけのためにわざわざ都会から人が来る。その多様性を活用すれば雪国の観光などこれから有望な地域振興策になる。

こうした時代の要請を鑑み、雪国づくりを考えるときの3つの基本的視点からの検討が必要となる。

- ① 人口の動態（人口減少と高齢化問題）
- ② 食料問題（40%の自給率）
- ③ 中山間地域問題

ところで、人口についていえば、雪国では若年層の激減と高齢者の増大、その結果生じる人口減少が最大の課題である。中山間地域の存続という重大な地域課題もこのなかに含まれる。

中山間地域と密接にかかわる第一次産業、とりわけ食料の確保という面を考えてみよう。わが国の食料自給率は40%ほどに低下している。その結果、輸入食料を生産するために、多くの貴重な水資源と国内耕地面積の2.5倍以上を海外に依存せざるを得ない状況となっている。世界の人口は現在63億人、発展途上国での爆発的な人口増加により、近い将来90億人になるといわれている。こうした状況下、60%の食料を今後とも国外からの輸入は可能か。急いでこの国で食料増産を図っておかないと国の存亡に関わることになる。

食料自給率40%のわが国で、自給率100%を超えているのは東北地方の4県（青森、岩手、秋田、山形県）と北海道のみで、いずれも雪国である。こうした地域で生産された食料を、安定的に都会の人々に届け

るためには、高規格交通システムの整備は不可欠である。

わが国の中山間地域（平野の周辺部から山間部に至る、まとまった耕地が少ない地域：平成元年農業白書）は、全国土の約68%を占め、そこに全人口の18%（東北地方では約70%、32%）が居住している。また、中山間地域の多くは、雪国の地域分布に一致している。作物を作る水にしても、世界的な水不足の中で、雪国は冬の間、山間部に雪として水を貯蔵し、耕作期に水として使用しているのである。ところが、人口の減少という面から見れば、わが国の人口は現在1億2,700万人、2050年には1億人に減少するといわれている。では約2700万人はどこで減るのであるのか。それは地方中小都市とそれを取り巻く中山間地域で減少すると予測されている。

中山間地域はわが国の文化の源の一つで、この地域が崩壊することは、それはまた日本文化の心がなくなるといえることに等しいのである。しかも農地や森林も荒廃する、それは山間地から海に注ぐ川を通じて海を痩せさせることにもつながり、文化だけでなく環境や食料面からいっても重大な問題となる。中山間地域問題は、都会に住む人々と地方に住む人々が等しくわが国共通の課題としての認識のもと、お互いに尊敬し、豊に生活できるバランスの取れた国づくりが必要なのである。

愛情や愛着を持ち、誇りを持って住んでいる人々の生活を最低限保証すること、農業を営み、山を守っている人々が自らの地域で暮らしやすくしてあげることが、結果として森林保護、環境保護、地球温暖化防止に役立つのである。そのためには、中山間地域を存続させ、足らざる機能を相互に補完できるように他地域と連携して活性化することが不可避なのである。とりわけ、生活権確保の視点からも冬季の交通確保は焦眉な課題といえる。

雪国づくりの理念としては、「安全、安心、快適、そして美しい雪国」ということになる。こうした環境で、生活できることは、雪国に住む人々の生活権、人権の問題ともいえる。その要をなすのは、交通の基盤整備である。しかし、一方で、厳しい財源を考慮すれば、雪に強い道路整備や除雪中心のハード対策には限界があり、ITSや道路の使い方などソフト面や雪国に住む人々の意識を変えるハート面を上手に組み合わせることが重要となる。

その他、ボランティアやNPOなどの活動協力体制をどのように活用するのかということも望まれる。それは、雪国の美しい自然、文化、伝統を次世代に引き継いでいくためには、ボランティアやNPOが大きな役割を果たすことになるからである。

—しみず こうしろう 秋田大学大学院工学資源学部教授—